

筑波大学 CEGLOC 日本語教育部門主催オンラインシンポジウム 第9回「未来志向の日本語教育」



開催日時

2024年8月8日（木）14:00~18:00 (JST)
@オンライン開催 (ZOOM)

共催：



趣旨

2019年2月にシリーズとしてスタートした本シンポジウムは、21世紀の刻々と変化する状況の中で日本語教育をどのように構想することができるのかを大きなテーマとし、幅広い分野の研究者に発表および意見交換の場を提供します。本シンポジウムの発表テーマは教員養成や学習者のスキル、現場での日本語に関する調査報告など、未来の日本語教育の発展を期待できる内容となっています。

プログラム

詳細は2ページをご参照ください。発表要旨は3ページよりご覧になれます。

アクセス

本シンポジウムはオンライン(Zoom)で開催されます。参加は無料ですが、2024年8月1日(23:55日本時間)までに参加登録をしてください。2024年8月6日までにミーティングのアクセスリンクを送信します。リンクが届かない場合は<moon.changyun.gf@u.tsukuba.ac.jp>にご連絡ください。

[参加登録フォーム](#)



お問い合わせ先： moon.changyun.gf@u.tsukuba.ac.jp

(シンポジウム実行委員長：文 昶允)

プログラム

- 3つのラウンジを設けています。議論を続けたい方など、ご自由にお使いください。
- 必ず Zoom の最新バージョンをインストールのうえ、ご参加ください。

13:45~	開場：Zoomにアクセス	
14:00~ 14:10	開会の挨拶：小野 正樹（筑波大学 教授／グローバルコミュニケーション教育センター長）	
14:10~ 14:50	ライトニングトーク	
	1. 任群 中国語母語話者を対象としたピア・ラーニングの検証ー学習者の学習過程に注目してー 2. Dadayeva Maysa インプットのみで外国語習得は可能か：トルクメン人大学生のロシア語学習を例に 3. CAI YAOYAO 日中接触場面における不満表明への理解のずれービジネス場面を中心にー 4. 朱雅蘭 日本語学習者の学術論文の序章に関する研究ー文章の構造及び執筆過程の分析を通してー 5. NGUYEN XUAN NGUYEN HANH 日本語とベトナム語における謝罪交渉ービデオ通話と文字チャットとの比較ー	
口頭発表		
口頭発表は2つのブレイクアウトルームで行われます。ご自由に移動してください。		
	ブレイクアウトルーム1	ブレイクアウトルーム2
14:50~ 15:20	口頭発表1：TRAN HA LUONG ベトナム人初中級日本語学習者に対するディクトグロス実践の効果ー日本語能力の変化と付随する協働学習の効果ー	口頭発表2：安達 万里江・陳 祥 パフォーマンス評価の実践報告：日本国際学園大学の取り組みによる成果と課題
15:20~ 15:50	口頭発表3：VU Kieu Ha My ピア・レスポンスによる初級レベル作文授業の可能性ーハノイ国家大学・外国語大学における1年生作文授業の事例ー	口頭発表4：大塚 薫・林 翠芳 国際共修を軸に据えた地域文化体験型授業の実践
15:50~ 16:00	休憩（10分）	
16:00~ 16:30	口頭発表5：董 雪 ドラマ作り活動中の否定的な発話パターンと妥協についてー初対面の中国語母語話者を中心にー	口頭発表6：浦 温美 LINEにおける三点リーダーと感嘆符「...！」にかんするー考察
16:30~ 17:00	口頭発表7：張 念祖 オンライン環境におけるピア・レスポンスの効果ー外国人留学生同士による活動からー	口頭発表8：君村 千尋・鈴木 秀明 元受講生はキャリア支援日本語コースでのゲストトークを通してどのような気づきを得たかー観察およびフォローアップ・インタビューを通してー
17:00~ 17:30	口頭発表9：アブリル ノラ 日本語学習アプリをやめる理由とは？ー日本で働く外国人の属性とアプリ使用習慣がドロップアウト率に与える影響ー	
17:30~ 17:40	総括：文 昶允（シンポジウム実行委員長、筑波大学 人文社会系 准教授）	
17:40~ 18:00	オンライン懇親会	

発表要旨（ライトニングトーク）

L1	<p>任群（文教大学大学院・大学院生）</p> <p>中国語母語話者を対象としたピア・ラーニングの検証ー学習者の学習過程に注目してー 中国の教育機関では教師主導で授業が行われることが多く、一斉授業に慣れている学習者は多い。来日間もない中国人留学生の中には日本での授業で、特に仲間と一緒に学び社会的な関係を築きながら行うピア・ラーニングを取り入れた授業に戸惑う人も少なくないようである。しかし、ピア・ラーニングは学びの意欲を引き出すこともでき、実践的な学びの中で協働力や創造力を身に付けられる方法であるため、この学習の方法に慣れることは学習者の日本語習得にとって意義がある。本研究では、日本国内の日本語教育機関に通う中国人学習者に焦点を当て、ピア・ラーニングを取り入れた授業で起こり得る問題を明らかにすることを旨とする。さらに、参与観察を行い学習者の協働的な学習方法に対する意識の変容を可視化してその上で協働学習に不慣れな学習者のためのピア・ラーニングの実践方法を提示しい。まだアイデア段階であり研究方法を含め検討を行っている。 renqun1220@gmail.com</p>
L2	<p>Dadayeva Maysa（筑波大学大学院・大学院生）</p> <p>インプットのみで外国語習得は可能か：トルクメン人大学生のロシア語学習を例に トルクメニスタンの幼稚園から高校卒業までの教育課程では、ロシア語と英語が必修科目として取り上げられている。しかし、英語ができる人は非常に少なく、そのかわりにロシア語ができる若者が見受けられる傾向にある。ロシア語ができる理由としては、今もソ連時代の影響が残っているのか、学校の教育に限定されているのか、あるいは別の外国語学習方法を利用しているのかについて、筆者は自身が教師として興味深い課題と捉えている。本研究では、アンケート調査を通じて、ロシア語を使用する機会が少ない人々を対象に、ロシア語ができる人とできない人を区別し、さらにロシア語ができる人々の能力やその要因について考察する。研究の目的は日常生活でロシア語を話す機会が少ないにもかかわらず、ロシア語が流暢に話せるトルクメン人大学生の言語教育の特徴をまとめ、その教育方法が言語習得にどのように影響を与えるかを分析することである。 maysadadayeva01@gmail.com</p>
L3	<p>CAI YAOYAO（筑波大学大学院・大学院生）</p> <p>日中接触場面における不満表明への理解のずれービジネス場面を中心にー 中国人日本語学習者（以下CJL）と日本語母語話者（以下JNS）のビジネス接触場面が頻繁に生じていると同時に、異文化コミュニケーション問題もよく見られている。CJLとして、いかに人間関係を損なうことなく円滑にコミュニケーションを進めていき、同時に相互理解を深めていくかが、仕事の成果を上げる上で重要だと言える。そこで、本研究では不満表明を取り上げ、日中企業間のビジネス接触場面において調査を行う。JNSの不満表明に対し、理解主体のCJLと表現主体のJNSそれぞれの捉え方の違いに着目し、その原因を考察した上で、対処方法を提案する。研究方法としてはまずロールプレイを通して会話データを収集し、その後JNSとCJLに質問紙調査とフォローインタビューを行い、不満表明への理解のずれと認識面の原因を分析する。本研究を通じて、ビジネス日本語教育への新たな示唆と日中異文化コミュニケーションの向上に寄与することが期待される。 s202420114@japan.tsukuba.ac.jp</p>
L4	<p>朱雅蘭（一橋大学大学院・大学院生）</p> <p>日本語学習者の学術論文の序章に関する研究ー文章の構造及び執筆過程の分析を通してー 学術論文を書く際に、ある「問い」に対して自分なりに研究史を組み立て、批判的に捉えることが求められる。特に、序章を書く際、「問い」に加え、先行研究への批判や研究目的を論理的に展開することが不可欠である。しかし、日本語学習者の序章には、先行研究の引用の不適切さ（中村他2017）や、「問い」に対する文章の一貫性の欠如（石黒2021）などの問題が度々見られる。本研究では、人文系大学院の日本語学習者の学術論文の執筆の困難点を明らかにするために、パソコンでの執筆過程の録画をもとに、中国人・韓国人日本語学習者の入力時及び修正時の言語操作を記録・タグ付けをし、序章の文章構造と結びつけて比較分析する。本研究における執筆過程とは、ある「問い」をもとに先行研究を序章に引用し、自分の論を組み立てるまでのプロセスと定義する。また、文章の一貫性の観点から序章の問題点を明らかにすることを目指している。 zhuyalan0814@gmail.com</p>
L5	<p>NGUYEN XUAN NGUYEN HANH（筑波大学大学院・大学院生）</p> <p>日本語とベトナム語における謝罪交渉ービデオ通話と文字チャットとの比較ー 本研究では、謝罪定型表現の使用と非使用が謝罪者の交渉戦略に及ぼす影響を明らかにし、ビデオ通話と文字チャットの場面での違いを考察する。課題の提出が遅れるという場面を用い、ZoomとLINE /Messengerでロールプレイを行った。調査協力者は日本語母語話者（JP）、ベトナム語母語話者（VN）、ベトナム人日本語学習者（VJ）の女子大学生及び大学院生である。謝罪者の場合、JPは謝罪定型表現を多用し、その際に表現の丁寧さによる使い分けが観察された。一方、VNとVJでは謝罪定型表現の使用と非使用の両方が見られ、特に定型表現が使用されない場合には、状況説明や理解要求、過失修復など、多様な戦略が観察された。被謝罪者の場合、JPは事態確認や非難を控え、問題解決を優先して交渉を緩和的に進める傾向が見られたが、VNとVJは問題解決を要求しつつも相手を攻撃的に非難する様子が観察された。また、文字チャットでは謝罪定型表現の使用が顕著に増えることが観察された。 nguyenhahn221295@gmail.com</p>

発表要旨（口頭発表）

P 1	<p>TRAN HA LUONG（東京学芸大学大学院・大学院生）</p> <p>ベトナム人初中級日本語学習者に対するディクトグロス実践の効果—日本語能力の変化と付随する協働学習の効果—</p> <p>本研究では、ベトナムのJFL環境において、初中級日本語学習者に協同的な学びであるディクトグロスを7回の授業で取り入れ、その効果を調査した。SPOTを使用して事前テストと事後テストを行い、さらに各回の再生率を比較することで学習の成果を検証した。分析の結果、事後テストの平均点が向上し、事前テストと事後テストの得点には有意な差が見られた。また、各回の再生率を調査すると、回数が増えるにつれて若干の変動があったが、全体的には向上傾向がみられた。また、SPOTの点数と再生率とでは、中程度の相関が確認できたため（$r=.59, p<.05$）、再生率が上がるにつれ、日本語能力点数（SPOT）も上がると言えるだろう。これにより、ディクトグロスを回数を重ねて実施することにより初中級日本語学習者の総合的な日本語能力向上に効果がある可能性が示唆された。</p> <p style="text-align: right;">haluongtranulis@gmail.com</p>
P 2	<p>安達 万里江（日本国際学園大学・助教）、陳 祥（日本国際学園大学・助教）</p> <p>パフォーマンス評価の実践報告：日本国際学園大学の取り組みによる成果と課題</p> <p>現在、日本語教育の現場では、文化庁（2021）が公表した「日本語教育の参照枠」が広く活用されており、パフォーマンス評価が中心に進められているが、教員や評価者の負担、評価の信頼性と一貫性などに対する懸念もある。そこで、本学はパフォーマンス評価に関連する課題を中心に、近隣の大学や他の日本語学校の関係者に呼びかけ、本学の日本語教員が招く講師を中心とした意見交換会などを行う。近隣の大学や他の日本語学校関係者と連携し、「対話型によるパフォーマンスの指導」とその実践のための課題などを把握し、比較を行う。具体的にはどのような評価方法が行われたのか、新しい枠組みの設定、その際の注意点について議論する。交流の成果として、本学にとって適切な日本語教育の新たな取り組みを内外に提案でき、パフォーマンス評価を取り入れている日本語教育関係者の一助となることを期待している。</p> <p style="text-align: right;">chen.hsiang@japan-iu.ac.jp</p>
P 3	<p>VU Kieu Ha My（ハノイ国家大学・日本語講師）</p> <p>ピア・レスポンスによる初級レベル作文授業の可能性 —ハノイ国家大学・外国語大学における1年生作文授業の事例—</p> <p>ハノイ国家大学・外国語大学の1年生の作文授業はコロナ時代から、学習者が録画した動画を見た後で例文をまね、文章を書くという流れで行われている。つまり、書く前に言いたいことを考える時間と書いた後のフィードバック時間がとれなくなり、書いた作文がいかどうか分からないという学生の意見が多かった。そこで、作文授業に協働学習を導入し、2023年2月から3週間の実践を実施した。協働学習が学習者に与える影響を探るため、導入する前と導入した後の授業について、学習者の意見をGoogleフォームで聞き、担当教師へのインタビューを行った。調査の結果から、協働学習で勧められた授業では、学習者が学んだ言語知識がすぐ使えるようになったことだけでなく、対話で言いたいことをきちんと考えたり表現したりして、その後自分が書いた文章について様々な読み手からの評価をもらって、自分が書いた文章の質がよくわかるようになったという結果が見られた。</p> <p style="text-align: right;">vukieuhamy2506@gmail.com</p>
P 4	<p>大塚 薫（高知大学・教授）、林 翠芳（高知大学・教授）</p> <p>国際共修を軸に据えた地域文化体験型授業の実践</p> <p>本研究は体験学習を基軸に据え、地域の現状や課題・取り組みを理解し、多文化共生社会においていかに地域振興を推進していくべきか、学生の目線から課題を見付け、その解決策を考え、地域の活性化への寄与を目的としたものである。また、このような一連の活動から得た学びを地域に還元する仕組みの構築を目指している。本授業は、2018年度から2023年度に至るまで留学生と日本人学生が対等の立場で学び合う国際共修授業が行われ、体験学習として地域の高校生や中山間地域の住民、県内企業の社員との交流が実施された。受講生の終了アンケート評価の結果、一連の授業の活動の満足度は高評価を博している。本授業を通して受講生個人が地域の現状や課題を認識し、自分事として地域との互恵関係の構築や多文化共生社会における地域振興についての解決策を提案するに至ったと言える。</p> <p style="text-align: right;">kaoru@kochi-u.ac.jp</p>
P 5	<p>董 雪（東京都立大学・博士研究員）</p> <p>ドラマ作り活動中の否定的な発話パターンと妥協について—初対面の中国語母語話者を中心に—</p> <p>グローバル化の進んでいる現代社会では、円滑なコミュニケーションを図る上、異なる考え方を折り合わせる場面で、相手の発話を否定することに注意する必要がある。ドラマ作り活動では、そのような場面が少なくない。本研究は否定発話のパターンと否定された後の妥協実態を明らかにしたい。本研究は3人のN1取得した学習者の5回の1時間30分の活動の会話を収集し、否定の意を表す発話をまとめ、分類した。オンラインで参加した日本在住の学習者は初対面、または面識があった。その結果、6パターンの否定発話が見られた。初回から最終回まで、学習者は否定の意を表す際に、できる限り直接的な言い方を避け、相手の気持ちを配慮したと言える。最終回のアンケートで「妥協」についての回答をまとめた。全員が妥協した、特に他者のセリフや考え方が実施困難なところに妥協したと回答した。仲間を信じ、限られた時間にドラマを完成したい等の妥協理由があった。</p>

<p>P6</p>	<p>浦 温美（筑波大学大学院・大学院生）</p> <p>LINEにおける三点リーダーと感嘆符「...！」にかんする一考察</p> <p>本発表は、三点リーダーと感嘆符の組み合わせ「...！」の使用意図を、LINEのチャットデータから明らかにすることを目的とする。「余韻」「含み」といった意味を持つ三点リーダーと、「驚き」「強調」の意味を持ち、さらには句点のように使われることもある感嘆符は、組み合わせることによって各符号の意味を離れたさまざまな意図を持つと考えられる。日本語母語話者の女子大学生から収集したLINEのチャットデータ125件（使用者38名）を分析した結果、「...！」は「命令」「禁止」「問いかけ」「推量」のような、いくつかのモダリティとは共起しづらいことが分かった。この結果から考察を行い、「...！」の使用意図として、(1)強い驚きを表す、(2)可能性の程度を調整する、(3)丁寧さを維持する、の3つが確認できた。本発表で確認した日本母語話者の「...！」の使用意図は、日本語学習者のチャットでのコミュニケーションにも役立つと考えられる。</p> <p>s202420088@japan.tsukuba.ac.jp</p>
<p>P7</p>	<p>張 念祖（筑波大学大学院・大学院生）</p> <p>オンライン環境におけるピア・レスポンスの効果—外国人留学生同士による活動から—</p> <p>本発表では、ピア・レスポンス（Peer Response、以下PR）がオンライン環境でも効果的に実施可能かどうかについて検討する。そこで、外国人留学生によるオンライン環境におけるPR活動を取り上げ、①作文プロダクト、②活動プロセス、③活動への所感、という複数の研究焦点から調査を行い、そのデータ分析をした。最初に、推敲前後の産出物の修正箇所を見だし、それを内容ごとに分類した。次に、PR活動での発話を26の発話機能にカテゴリ化した。最後に、KJ法を用いて、活動後のインタビューで収集した協力者の語りを整理した。その結果、①からPRの効果は乏しいが、②と③から効果が豊かであるという、各研究焦点から得た結果に差異が生じているが、PRがオンライン環境でも効果的に実施可能であることが明らかになった。しかし、横断研究である本研究では、PR活動の積み重ねによる変化を示すことができなかつたため、今後、縦断研究により検討する必要がある。</p> <p>cho.nenso.2023@japan.tsukuba.ac.jp</p>
<p>P8</p>	<p>君村 千尋（筑波大学・CEGLOC非常勤講師）、鈴木 秀明（筑波大学・CEGLOC非常勤講師）</p> <p>元受講生はキャリア支援日本語コースでのゲストトークを通してどのような気づきを得たか—観察およびフォローアップ・インタビューを通して—</p> <p>本発表では、キャリア支援日本語コース「大学院進学のための日本語（面接）」クラスの元受講生が、ゲストトークを通してどのような気づきを得たかを報告する。当該クラスでは、毎学期授業内にゲストトークコーナーを設け、元受講生から入学試験対策、大学院での研究生活、就職活動のノウハウなどを語ってもらう。過去に登壇した元受講生3名へのインタビューから、(1)自分の経験談の提供が現受講生に役立つことを実感し、自身の役割を認識した。(2)現受講生の質問に対して適切に回答できなかったことで、プレゼンテーションの準備の重要性を実感した。(3)担当教師や現受講生との繋がりや信頼関係の構築を喜ばしく感じていた、などがわかった。これからのことから、当該科目のゲストトークのコーナーは、体験談を聴く受講生はもとより、登壇する元受講生にとっても、様々な気づきをもたらす有益な機会となっていることがうかがえた。</p> <p>chihiroki.217@gmail.com</p>
<p>P9</p>	<p>アブリル ノラ（早稲田大学大学院・大学院生）</p> <p>日本語学習アプリをやめる理由とは？—日本で働く外国人の属性とアプリ使用習慣がドロップアウト率に与える影響—</p> <p>言語学習アプリは効果、感想、およびコンテンツといった様々な側面から研究されてきた。しかし近年では、行動的エンゲージメントの観点から見た言語学習アプリ使用の持続性が注目されてきた。本研究では働く日本在住外国人の属性と日本語学習アプリの使用習慣に関するアンケート回答を分析し、アプリをやめる人のパターンを探った。分析方法としては決定木分析でアプリをやめた人の使用習慣および属性を明らかにした。結果としては①一回の勉強セッションが10分以上の協力者はアプリ使用を続ける確率が高い。②勉強セッションが10分以下の人の中では、毎日アプリを使う人の方がアプリ使用を続ける確率が高い。③日本語上級者はアプリを辞める傾向がある。④日本語初級者・中級者はアプリ使用を続ける傾向があり、中では40歳～60歳の協力者のほうが続ける確率が高い、などといった結果が出た。上記の結果を先行研究と照らし合わせて考察する。</p>